

合、祖父母等の高齢者との交流経験が多いほど肯定的なイメージをもち、高学年ほど否定的なイメージをもつ傾向があることが明らかになっている。しかしこの方法には、予め調査者側が設定した項目以外のイメージを測定できないという限界があった。

そこで本研究では、児童の高齢者イメージをありのままに把握するため自由記述法を用いてイメージを測定し、そのイメージに影響を及ぼす要因を分析することを目的とする。

B. 対象と方法

1. 調査対象・方法

中央区立 X 小学校は、2006 年度より“REPRINTS”ボランティアの活動施設となった。X 校では 1 学級あたり月 2 回、朝の学級活動の時間に“REPRINTS”ボランティアが 1～3 年生の教室を訪問し、絵本の読み聞かせを行っている。X 校において本研究への協力を得ることができたことから、“REPRINTS”ボランティアが活動を開始した約 1 カ月後（2006 年 9 月；夏休み期間を除く）に調査を行った。調査対象は、2006 年 9 月 1 日時点で X 校に在籍する児童全 220 名である。

調査は、1 週間の期間を設け、その期間内の任意の授業時間（学級活動の時間を含む）において、学級単位での集合自記式アンケートで行われた。各学級の担任が質問を読み上げながら調査を進行した。ただし 1 年生は、授業時間内での調査時間の確保が困難であったため、保護者の監督の下での自宅回答とした。

調査項目は、学年・性別のほか、①祖父母との同居経験の有無、②祖父母等の高齢者との交流経験（一緒に遊んでもらう／本を読んでもらったり昔話をしてもらったりする／悲しいことやつらいことがあったときに、話を聞いてもらったり励ましてもらったりする／病気やケガのときに看病してもらおう）、③“REPRINTS”ボランティアと

の交流頻度（あいさつ／会話）、④自由記述法による高齢者のイメージ、である。高齢者のイメージについては、図 1 のように二つの記述欄を設け、左側に「おとしよりについて好きな点」を、右側に「苦手な点」を自由に挙げるよう指示し、十分な時間を取って記述させた。

2. 分析対象・方法

有効回答を得られたのは 207 名（94.1%）であった。これらを対象に、以下の分析を行った。

(1) 高齢者イメージの基礎集計

まず、各回答から高齢者のイメージを表していると思われる単語を抽出・分類した（図 2 上）。項目ごとに回答数を集計すると共に、各回答において挙げられた項目数を集計した。

次に、回答を全てひらがなに直し、行頭文字や句読点を抹消した上、文末の表記を統一した上で、文字数を集計した（図 2 下）。

図 1 高齢者イメージの測定方法①：記述欄

図 1 には、調査票の記述欄の指示文が示されている。内容は「あなたが、おとしよりについて好きな点と苦手な点・好きな点と苦手な点を、下のわくの枠に自由に書いてください。」とある。

<p>(好きな点)</p> <p>*ないときは「なし」と書きましょう。</p> <p>いつもやさしくして休んだり遊んでくれたり、時にはほげえんてくれるところ。</p>	<p>(苦手な点)</p> <p>*ないときは「なし」と書きましょう。</p> <p>少し話がながい時がある。</p>
-------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------

図 2 高齢者イメージの測定方法②：集計方法

<p>◆項目数</p> <p><好きな点> …「やさしくしてくれる」「遊んでくれる」「励まし・なぐさめてくれる」(3 項目)</p> <p><苦手な点> …「話がわかりづらい・長い・しつこい」(1 項目)</p> <p>-----</p> <p>◆文字数</p> <p><好きな点> …「いつもやさしくしてくれたりあそんでくれたりときにはほげましてくれる」(33 文字)</p> <p><苦手な点> …「すこしはながいときがある」(15 文字)</p>

自由記述法を用いる場合、定性的な回答をそのまま使用してイメージの強さを比較するのは極めて困難である。そこで、多くの項目が挙げられている／文字数が多く使用されているほど、好きな点あるいは苦手な点について主張したいことが多い、即ち好きなあるいは苦手なイメージが強いものと仮定し、イメージの強さを比較した。

(2) 各高齢者イメージに影響を及ぼす要因の分析

高齢者イメージとして挙げられた項目全てについて、各対象者が挙げているか否かを目的変数、性別・学年・前記①～③を説明変数とするロジスティック回帰分析を行い、各イメージについてそれを生起する要因を分析した。各説明変数の投入は強制投入法による。

(3) 肯定的／否定的な高齢者イメージに影響を及ぼす要因の分析

好きな点・苦手な点として挙げられた各項目数ないし文字数を目的変数、性別・学年・前記①～③を説明変数とする重回帰分析を行い、肯定的／否定的な高齢者イメージの生起に影響する要因を分析した。各説明変数の投入は強制投入法による。

以上の統計処理は全て、SPSS14.0J を用いて行った。

3. 倫理的配慮

本調査は主として児童の高齢者イメージを尋ねるものであるが、質問の内容によっては、質問自体が高齢者に対する否定的なイメージを児童に喚起させるという負の教育効果を生じさせるおそれがある。そこで、自由記述の提示方法をはじめ全質問項目につき、X 校々長および副校長に教育的視点からの判断を仰ぎ、適切とされた項目のみを用いた。

また、個人情報保護の観点からは、個人を特定できない形でデータを取り扱う必要がある。そこで、対象者には ID 番号を付与した上、ID 番号と学籍番号の連結表は調査票の回答データとは別に厳重に保管し、

分析では ID 番号のみで対象者を管理する連結可能匿名化方式を採った。

これらの手続については、予め東京都老人総合研究所倫理委員会による審査で承認された。

C. 結果

関連要因として、学年・性別、祖父母との同居経験、祖父母等の高齢者との交流経験についての基礎集計を表 2～表 4 に示す。

各学年の男女比にややばらつきがあったものの、 χ^2 検定によると統計的に有意な差は見られなかった。

表 2 学年・性別

学年	男子	女子	不明
1	14 (36.8%)	23 (60.5%)	1 (2.6%)
2	24 (51.1%)	23 (48.9%)	-
3	15 (53.6%)	13 (46.4%)	-
4	19 (44.2%)	24 (55.8%)	-
5	13 (50.0%)	13 (50.0%)	-
6	15 (60.0%)	10 (40.0%)	-

表 3 祖父母との同居経験

	度数
現在同居している	22 (10.6%)
以前同居していた	45 (21.7%)
同居経験なし	140 (67.6%)

表 4 祖父母等の高齢者との交流経験

	経験あり
① ボール遊び・縄跳び・ゲーム等をして一緒に遊んでもらう	153 (73.9%)
② 本を読んでもらう／昔話をしてもらう	126
③ 悲しいとき・つらいときに話を聞いてもらう／励ましてもらう	102 (49.3%)
④ 病気・けがのときに看病してもらう	122

(1) 高齢者イメージの基礎集計(図 3～図 8)

高齢者のイメージのうち、「好きな点」として挙げられた項目(上位 10 位まで; 複数回答)を図 3 に、「苦手な点」として挙げられた項目(上位 5 位まで; 複数回答)を図 4 に示す。

図3 好きな点

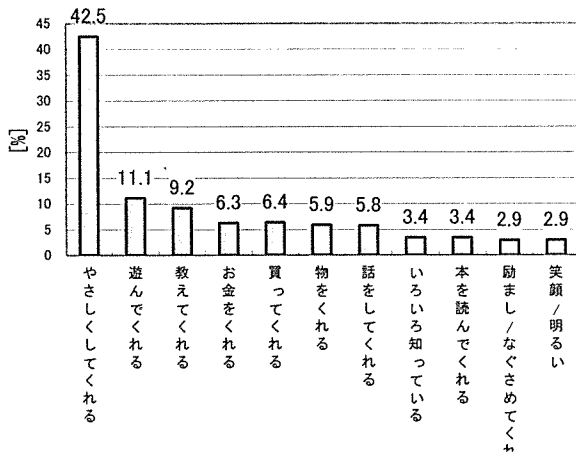


図4 苦手な点

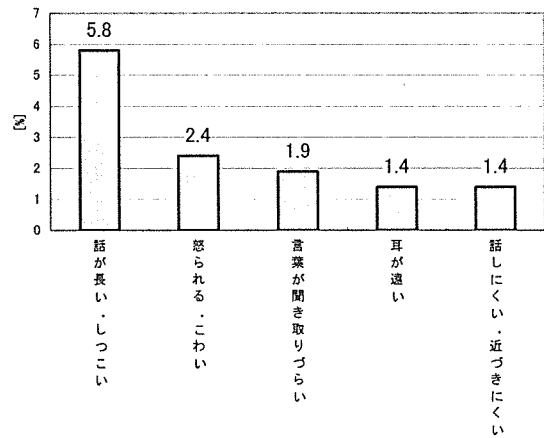


図5 好きな点(項目数)

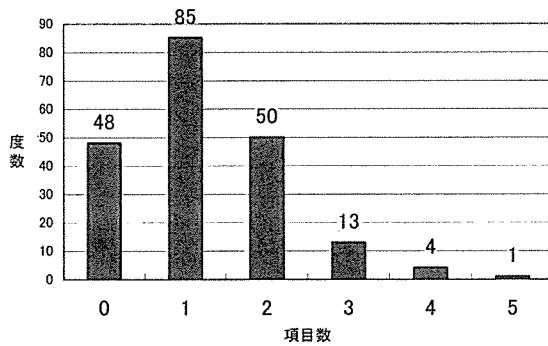


図6 苦手な点(項目数)

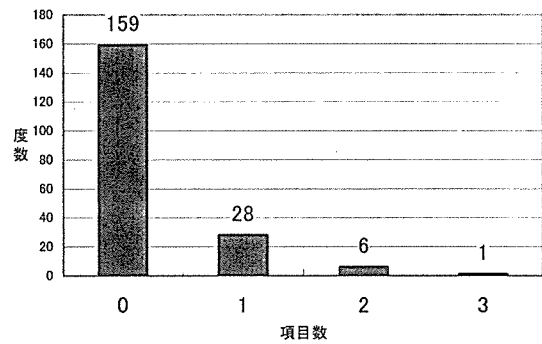


図7 好きな点(文字数)

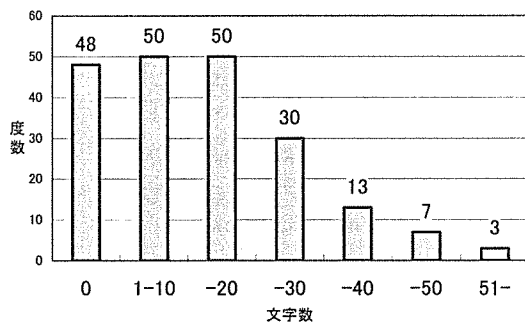
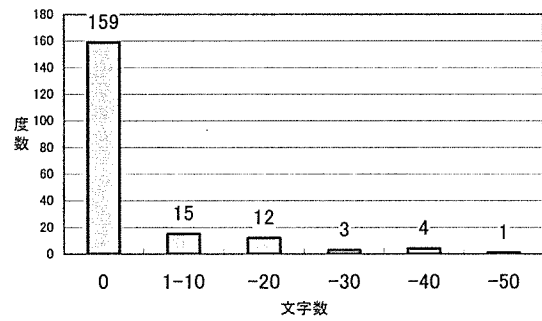


図8 苦手な点(文字数)



好きな点では「やさしい」「やさしくしてくれる」が42.5%で最も多く、次いで「一緒に遊んでくれる」(11.1%)、「昔のことや遊びを教えてくれる」(9.2%)であった。苦手な点では「話が長い・しつこい」(5.8%)、次いで「怒られる・怖い」(2.4%)、「言葉が聞き取りづらい」(1.9%)の順であった。

項目数・文字数の分布を図5～図8に示す。好きな点での各数の平均±sdは1.22±0.98個および13.9±13.5文字、苦手な点では0.22±0.52個および2.75±7.52文字であ

った。

(2) 各高齢者イメージに影響を及ぼす要因の分析(表5)

イメージとその生起に影響を及ぼす要因の組み合わせのうち、有意な寄与があったもののみを表5・表6に示す。

本を読んでもらったり昔話をしてもらった経験がある児童ほど「一緒に遊んでくれる」と回答し、高学年ほど/女子の方が「昔のことや遊びを教えてくれる」と回答する有意な傾向があった。また、一緒に遊

表 5 各高齢者イメージに影響を及ぼす要因(好きな点)

	オッズ比 95%信頼区間	
昔のことや昔の遊びを教えてくれる		
学年	1.59*	1.10-2.30
性別(女子)	3.17*	1.00-10.01
いろいろなことを知っている		
学年	2.48*	1.03-5.98
一緒に遊んでくれる		
経験_本・昔話(あり)	5.33*	1.37-20.79
ボランティア_あいさつ	4.21*	1.12-15.84
親切にしてくれる		
学年	10.06*	1.12-90.69

*: p<0.05

表 6 各高齢者イメージに影響を及ぼす要因(苦手な点)

	オッズ比 95%信頼区間	
言葉が聞き取りづらい		
経験_一緒に遊んでもらう(あり)	0.02*	0.00-0.52

*: p<0.05

んでもらった経験がない児童ほど「言葉が聞き取りづらい」と回答する有意な傾向があった。

(3) 肯定的／否定的な高齢者イメージに影響を及ぼす要因の分析(表7・表8)

好きな点・苦手な点各々の項目数・文字数に対して有意な寄与があった関連要因のみを表7・表8に示す。

好きな点では、項目数・文字数の双方に対し、童話や昔話を読んでもらった経験・話を聞いて励ましてもらった経験・ボランティアにあいさつをした経験がそれぞれ独立に有意な寄与を示し、各経験がある児童ほど好きな点が増加する傾向があった。一方苦手な点では、項目数・文字数双方に対し学年が有意な寄与を示し、高学年ほど苦手な点が増加する傾向があった。

D. 考察

高齢者のイメージについては、やはり「やさしい」「やさしくしてくれる」という回答が圧倒的に多かった。同居していない祖父母は父母よりやさしく(甘く)児童に接す

るケースが多いと考えられることから、同表7 肯定的イメージに影響を及ぼす要因

	標準偏回帰係数 (β)	p 値
好きな点(項目数)		
経験_本・昔話	0.21	**
経験_話を聞いて励ましてもらう	0.19	*
ボランティア_あいさつ	0.14	*
好きな点(文字数)		
経験_本・昔話	0.19	*
経験_話を聞いて励ましてもらう	0.16	*
ボランティア_あいさつ	0.15	*

**：p<0.01 *：p<0.05

表 8 否定的イメージに影響を及ぼす要因

	標準偏回帰係数 (β)	p 値
苦手な点(項目数)		
学年	0.26	**
苦手な点(文字数)		
学年	0.19	*

**：p<0.01 *：p<0.05

居経験がない割合が6割弱の現状では納得できる結果といえよう。

その他、好きな点については、「一緒に遊んでくれる」「昔のことや遊びを教えてくれる」といった交流に関する回答は4割弱、「お年玉・おこづかいをくれる」「おもちゃを買ってくれる」等の金銭・物に関する回答は約2割であった。祖父母と児童の関係は、最近では金銭や物を通したものに偏りがちというイメージで見られがちだが、児童の印象に残るのは、むしろ、遊びや知識の伝達を通じた交流であることが示唆されている。

一方、苦手な点については、「話が長くて分かりづらい・しつこい」「耳が遠い」等の老化に伴う現象に対する不満、「怒られる」「近づきにくい」「話題が合わない」等の親近感の欠如が見られた。もっとも、好きな点で挙げられた項目に比較するとその項目数・文字数ともに明らかに少なく、全体を平均すると概ね良いイメージを持っている

ことが示唆されている。

本を読んでもらったり昔話をしてもらったりした経験・話を聞いて励ましてもらった経験・ボランティアにあいさつをした経験、といった言語的コミュニケーションの経験があるほど、肯定的な高齢者イメージをより多くもつ有意な傾向があった。一方、学年（年齢）が上がるほど、否定的な高齢者イメージをより多くもつ有意な傾向があった。祖父母との同居経験はいずれの高齢者イメージにも影響を及ぼさなかった。

SD法を用いたこれまでの研究では、祖父母等の高齢者との交流経験が多いほど高齢者イメージは有意に肯定的であり、学年（年齢）が上がるほど有意に否定的であるとされていた。自由記述法を用いた本研究においても、高齢者イメージに高齢者との交流経験と学年（年齢）が影響するという点では一致した傾向が表れている。しかし、本研究の結果によれば、高齢者との交流経験の多寡は高齢者に対する否定的なイメージには有意な影響を及ぼしておらず、同様に学年（年齢）の上昇は肯定的なイメージには有意な影響を及ぼしていない。高齢者に対する肯定的なイメージと否定的なイメージは、一方が増えると他方が減るといったトレード・オフの関係にあるものではなく、それぞれが独立しており、高齢者との交流経験（特に言語的コミュニケーション）は肯定的イメージのみに、学年（年齢）は否定的イメージのみに影響していることが新たに明らかになった。

今後、児童の高齢者イメージを研究するにあたっては、かかる視点を取り入れた分析が必要になると考えられる。

E. 結論

自由記述法によっても、高齢者イメージに祖父母等の高齢者との交流経験及び学年が影響することが確認された。ただし、交流経験の有無は肯定的イメージのみに、学年は否定的イメージのみに影響することが

新たに示された。

[文献]

- 1) Koyano W. Japanese attitudes toward the elderly: A review of research findings. *Journal of Cross-Cultural Gerontology* 1989; 4: 335-345.
- 2) 吉田純子, 冷水豊. 児童と老人との交流. *社会老年学* 1991; 34: p3-12.
- 3) 中野いく子. 児童の老人イメージ—SD法による測定と要因分析—. *社会老年学* 1991; 34: p23-36.
- 4) Jantz RK, Seefeldt C, Galper A, et al. *The CATE: Children's attitudes toward the elderly*(Test Manual). University of Maryland, Collage Park. 1976.
- 5) 岩下豊彦. *SD法によるイメージの測定*. 東京: 川島書店, 1983.
- 6) 井上正明, 小林利宣. 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観. *教育心理学研究* 1985; 33(3): p253-260.

F. 研究発表

1. 論文発表

- 1) 藤原佳典, 渡辺直紀, 西真理子, 他. シニアボランティアとの交流が児童の高齢者イメージに及ぼす影響—世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム“REPRINTS”より—. *日本公衆衛生雑誌*(投稿中).
- 2) 藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 他. 高齢者によるボランティア活動の意義と心身の健康に及ぼす影響—productivityとしての理論から実践的課題へ—. *秋田県公衆衛生学雑誌* 2006; 4:12-20.
- 3) 藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 他. 都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム—

“REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果－. 日本公衆衛生雑誌 2006; 53:701-714.

2. 学会発表

- 1) 藤原佳典, 西真理子, 李相侖, 他. 高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム “REPRINTS” –1. ボランティア活動への満足度評価－. 日本老年社会科学会第48回大会, 兵庫, 2006. 6. 24-25.
- 2) 井上かず子, 藤原佳典, 西真理子, 他. 高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム “REPRINTS” –2. KJ法による第一期, 第二期ボランティアの比較－. 日本老年社会科学会第48回大会, 兵庫, 2006. 6. 24-25.
- 3) 渡辺直紀, 藤原佳典, 西真理子, 他. 高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム “REPRINTS” –3. 児童の高齢者イメージに及ぼす短期的影響－. 日本老年社会科学会第48回大会, 兵庫, 2006. 6. 24-25.
- 4) 西真理子, 藤原佳典, 渡辺直紀, 他. 高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム “REPRINTS” –4. 「交流授業」を通じた6年生児童における高齢者イメージの変化－. 日本老年社会科学会第48回大会, 兵庫, 2006. 6. 24-25.
- 5) 佐久間尚子, 呉田陽一, 伏見貴夫, 他. 高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム “REPRINTS” より－高齢者ボランティア活動と認知機能. 日本老年社会科学会第48回大会, 兵庫, 2006. 6. 24-25.
- 6) 李相侖, 藤原佳典, 西真理子, 他. 世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム “REPRINTS” –1. ボランティア参加の現状/影響－. 第65回日本公衆衛生学会総会, 富山, 2006. 10. 25-27.
- 7) 西真理子, 藤原佳典, 李相侖, 他. 世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム “REPRINTS” –2. 活動満足度と心理変数の関連－. 第65回日本公衆衛生学会総会, 富山, 2006. 10. 25-27.
- 8) 藤原佳典, 渡辺直紀, 西真理子, 他. 世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム “REPRINTS” –3. 児童の保護者への効果－. 第65回日本公衆衛生学会総会, 富山, 2006. 10. 25-27.

G. 知的所有権の取得状況

なし

[研究協力者]

渡辺直紀, 西真理子, 大場宏美, 小宇佐 陽子, 李相侖, 吉田裕人, 深谷太郎.
(東京都老人総合研究所・社会参加とヘルスプロモーション研究チーム)

[研究協力校]

中央区立豊海小学校

都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS”

—4. プログラムの波及効果に関する研究：保護者・一般市民への認知度調査から—

分担研究者 角野 文彦 滋賀県東近江地域振興局地域健康福祉部長

〔目的〕“REPRINTS”プログラムは、高齢者が小学校で子どもたちに定期的に読み聞かせを行うボランティア事業である。本研究の目的は、本事業の保護者や一般市民への波及効果をしらべることとし、以下の3つの調査を行なった。

〔方法〕調査1. 本事業の導入されている中央区と川崎市の2小学校の全保護者475人に対して、6ヶ月毎に計4回の無記名、学校配布・回収、自記式アンケートをおこない、保護者の本事業への認知度や評価の変化を調べた。調査2. 長浜市において市内全13小学校の1, 3, 5年生児童の全保護者2457人に対して、無記名、学校配布・郵送返信、自記式アンケートをおこない、本事業の導入済みの8小学校と未導入の5小学校の保護者の認知度を比較した。調査3. 本事業をヘルスプロモーション戦略「健康日本21・地方計画(健康ながはま21)」の重点事業として位置づける長浜市において、一般市民(55歳～79歳住民から1/10無作為抽出された1888人)への郵送式、認知度調査を行なうことにより、「健康ながはま21」の推進に与える影響を調べた。

〔結果〕調査1では、ボランティアに対する認知度は1.5年間で有意に増加し、ボランティアへの評価は「児童の読書推進への効果」、「地域づくり全体への波及効果」、「保護者の物理的負担の軽減」、「保護者の心理的負担の軽減」および総合評価は有意に向上した。調査2では、学校別の認知度は、導入2.5年後の3校が最も高かった(64.4%)。保護者が本事業へ最も期待する点は学校に関わらず、「高齢者と子どもの双方が親しみを持つ」であった。調査3では、高齢者世代(60歳～79歳)の認知度は、全体で38.2%であり、第1回認知度調査(平成18年2月実施)の同年齢(全体32.6%、女性37.1%、男性27.4%)に比べて、認知度は高く、特に男性は10%程度上昇した。市民が期待する効果は世代、性に関わらず、「高齢者と子どもの双方が親しみを持つこと」が最も多かった。

〔結論〕本事業は導入3年目にして、保護者への認知度や評価が高まってきた。さらには一般市民への認知度も高まりつつある。ソーシャル・マーケティング理論によるプロモーション(宣伝)活動の視点からは本事業における認知度向上策つまり、普及啓発戦略はある程度の成功をみたと言えよう。

A. 研究目的

シニア読み聞かせボランティア事業“REPRINTS”は、高齢者ボランティアや子どもへの福利のみならず、1)保護者への波及効果や、さらには、2)多世代の共生による豊かな地域づくり(ソーシャル・キャピタルの醸成)に寄与することまでをもねらいとしている。1)は、①本事業の導入されている小学校において、保護者の事業への認知度や評価の変化を調べること、②本事業の導入されていない小学校の保護者の認知度と比較すること、2)は本事業をヘルスプロモーション戦略「健康日本 21-地方計画(健康ながはま 21)」の重点事業として位置づける長浜市において、一般市民への認知度調査を行なうことにより、「健康ながはま 21」の推進に与える影響を調べることを目的とする。

B. 研究方法

1)保護者への調査:

【調査 1】対象は川崎市多摩区 A 小学校(児童数:平成 16 年度 470 人, 17 年度 475 人, 18 年度 502 人; 保護者数: 16 年度 368 人, 17 年度 376 人, 18 年度 399 人)および東京都中央区 B 小学校(児童数:平成 16 年度 113 人, 17 年度 130 人, 18 年度 124 人; 保護者数: 16 年度 107 人, 17 年度 108 人, 18 年度 102 人)の保護者全員である。無記名式、担任から児童を通して、配布・回収した。A 校では 2004 年 10 月以降、B 校では 2005 年 1 月以降、各々シニアボランティア 6~10 人が週 2 回小学校を訪問し、絵本の読み聞かせを主とした児童との交流を継続してきた。1 ヶ月間試験的に活動を開始した時点でベースライン調査をおこない、その後、定期的な読み聞かせ活動を開始した。以降、6 ヶ月ごとに計 3 回、各校の保護者を対象に無記名・自宅回答によるアンケートを行った。質問項目は保護者の性、年齢、児童の学年、居住歴、「おとしより」とみなす年齢、高齢者に対する一般的なイメージ(SD 法により 5 件法・13 項目により 65 点満点で評価)、“REPRINTS”ボランティアに対する認知度および評価(児童の読書推進への効

果、児童の高齢者への尊敬、児童の高齢者への感謝、児童の高齢者への親近感、地域づくり全体への波及効果、保護者の物理的負担の軽減、保護者の心理的負担の軽減を 5 件法により 35 点満点で評価)であった。尚、総合評価は上記の 7 項目の平均点より求めた。

【調査 2】長浜市内の小学校全 13 校の 1 年生, 3 年生, 5 年生の全保護者 2457 人に対し、無記名、学校配布、郵送返信によるアンケートを実施した(平成 19 年 1 月 31 日~2 月 16 日)。回収数は 666 人、回収率は 27.1%であった。

2)一般市民への調査:

【調査 3】平成 17 年度に実施した第 1 回認知度調査と同様の調査票を用いて、55 歳~79 歳の市民の 1/10 サンプルを無作為抽出し 1888 人(回収率 33.5%)を対象に、郵送式アンケート調査を実施した(平成 19 年 1 月 31 日~2 月 16 日)。

C. 調査結果

1)保護者への調査:

【調査 1】

保護者の応答率は第一回調査 95.4%, 第二回調査 70.0%, 第三回調査 69.4%, 第四回調査 68.3%であった。「児童が家庭でシニアボランティアのことを話題にした」と回答した保護者は有意に増加した(第二回調査, 第三回調査および第四回調査でそれぞれ 52.1%, 54.6%, 63.1%, $p=0.021$)。高齢者に対するイメージでは有意差はみられなかった。ボランティアに対する認知度は有意に増加し、ボランティアへの評価は「児童の読書推進への効果」, 「地域づくり全体への波及効果」, 「保護者の物理的負担の軽減」, 「保護者の心理的負担の軽減」および総合評価は有意に向上した。1.5 年間の REPRINTS ボランティアの活動により、保護者の高齢者に対する一般的イメージの改善までには至らなかったものの、活動の認知度とその評価は向上してきた。

図1. 保護者の高齢者イメージと“REPRINTS”ボランティアへの認知度の推移

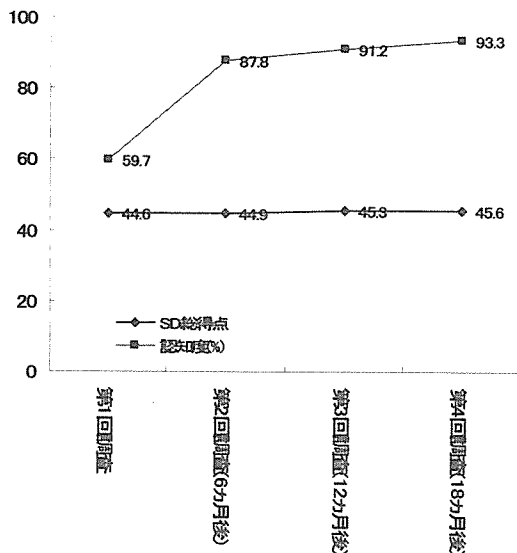
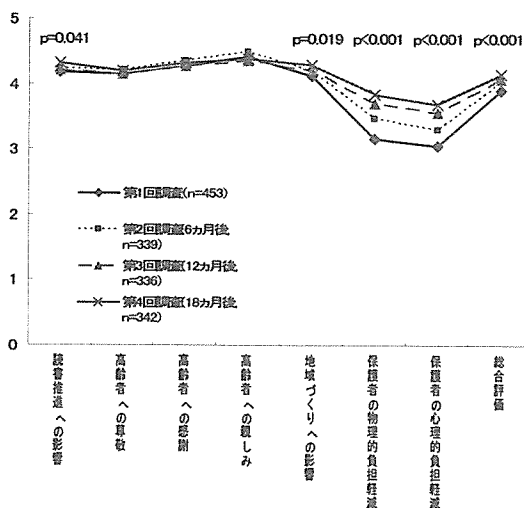


図2. 保護者の“REPRINTS”ボランティアへの評価の推移



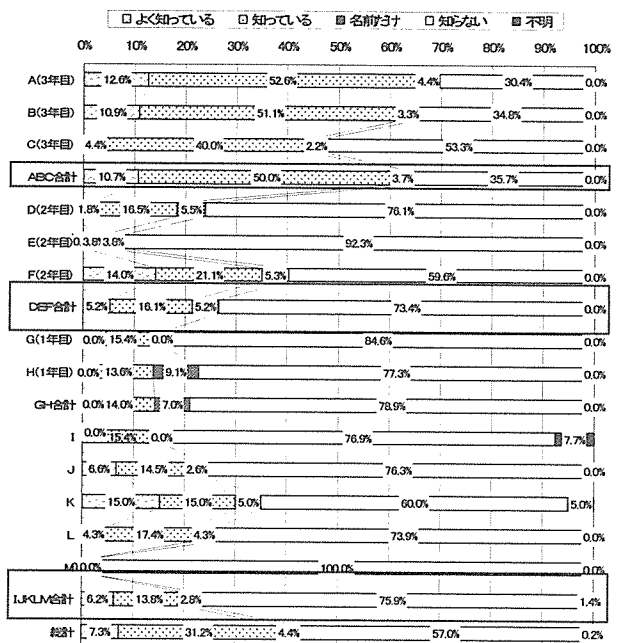
【調査2】

回答した保護者の年齢は35歳～45歳が75%を占めていた。学校別回収率の平均は、導入2.5年後の3校(25.9%)、1.5年後の3校(26.7%)、0.5年後の2校(30.2%)、未導入の5校(26.6%)であった。「よく知っている」、「知っている」、「名前くらいは知っている」を合わせて、認知度は全体で40.7%であった。学校別の認知度は、導入2.5年後の3校(64.4%)、導

入1.5年後の3校(26.5%)、0.5年後の2校(21.0%)、未導入の5校(22.8%)であった。

保護者が本事業へ最も期待する点は学校の区別無く、「高齢者と子どもの双方が親しみを持つ」であった。自由記載欄にみる期待には、「地域の人との交流で顔を覚える」「子どもが年長者へのいたわりの気持ちを持てる」「折り紙、昔のおもちゃ作り等を教えてくれる」「脳の活性化に繋がる」「学校の内側に様々な人の目や関心が向けられる」「子どもがボランティアそのものに興味を持つ」「子どもたちへの昔話の伝達ができる」「ご自身の体験等を話していただくことが子どもへの刺激になる」「年長者の自己満足にならないこと」があった。

図3. 保護者の「ジバーぽこぽこ(“REPRINTS・ながはま”）」事業への認知度(学校別)



2)一般市民への調査:

【調査3】

高齢者世代(60歳～79歳)の認知度は「よく知っている」、「知っている」、「名前くらいは知っている」を合わせて、全体で38.2%(女性40.6%、男性36.0%)であった。5歳階級別ではどの層でも差は無く、おお

よそ 40%前後であった。第 1 回認知度調査の同年齢（全体 32.6%，女性 37.1%，男性 27.4%）に比べて、認知度は高く、特に男性は 10%程度上昇した。

一方、向高齢者世代（55 歳～59 歳）の認知度は全体で 27%（女性 31.1%、男性 21.1%）であった。市民が期待する効果は世代、性に関わらず、「高齢者と子どもの双方が親しみを持つこと」が最も多かった。

図 4. 「ジーバーぼこぼこ（“REPRINTS・ながはま”）への認知度

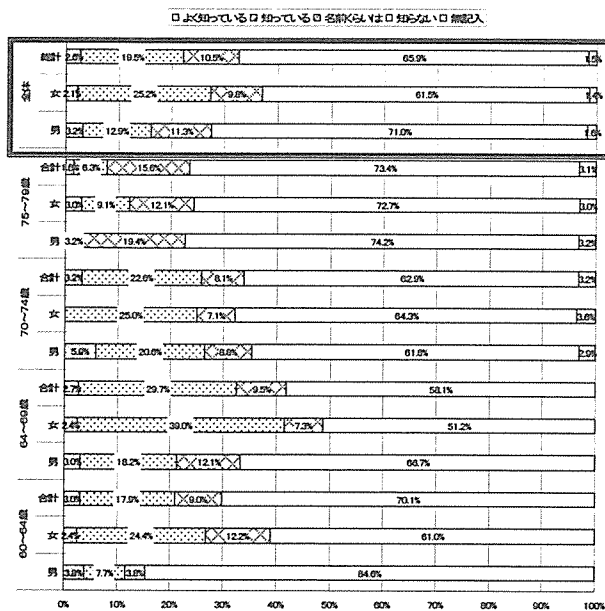
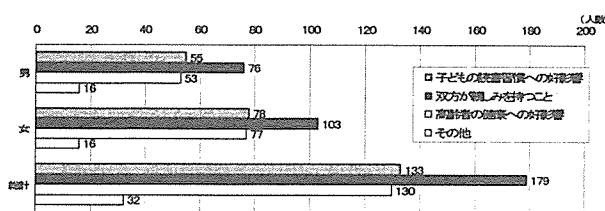


図 5. 「ジーバーぼこぼこ（“REPRINTS・ながはま”）に期待される効果



D. 考察

1) 保護者への調査から:

【調査 1】より、1.5 年間で“REPRINTS”プログラムに対する保護者の認知や評価が高まったことがわかった。アンケートは無記名式の反復・断面調査で

あったが、ボランティアとの交流年数が 1 年少ない、平成 18 年度 1 年生や平成 16 年度 6 年生の保護者の回答を除いた場合でも、結果に大きな違いはなかった。いずれも、第二回調査以降の回答率は 70%近くを維持しており、保護者の高い関心が伺われた。ボランティアを導入後、時間の経過とともに、児童からの口コミ、「学校だより」、運動会や卒業式といった公開日への招待等により、本事業への理解が促されたものと考えられる。“REPRINTS”が児童を媒介として、高齢者と保護者世代にまたがる三世代の相互理解に寄与しうることが示唆された。

【調査 2】における学校別の認知度では、“REPRINTS”プログラムを導入した期間により保護者の認知度に差がみられた。特に、導入後 2.5 年経過した小学校では認知度が高かった。学校ごとに読み聞かせの方法や頻度は異なるが、保護者全体に本事業が浸透してきたと考えられる。保護者ボランティアとともに、「読み聞かせ」のプログラムやボランティア・ミーティング、図書室サポート活動を共有・分担する学校もあり、保護者世代との自然な交流が見られる場合がある。

一方、平成 18 年 2 月に長浜市内で保護者による幼稚園児殺害事件が発生し、部外者の学校内への訪問が制限されるのではないかと危惧されたが、全校ともななら制約なく、本事業は継続された。本事業が教職員や保護者に支持されてきた証と言えよう。

2) 一般市民への調査から:

1. ソーシャル・マーケティング理論の応用

保健分野へのマーケティング技術の応用をソーシャル・マーケティングという。その定義は、「対象者に対して健康によい行動を行うことを勧める場合に、その行動を採用してもらう可能性が上がるように、健康教育プログラムの計画、実施、評価などに商業分野のマーケティングの考え方や技術を応用すること」とされている。実際の考え方や技術として、次の「4 つの P」が挙げられる。①プロダクト（製品：対象者に採用してもらいたい行動のこと。この

プロジェクトでは、高齢者がボランティアを行うという行動)、②プライス(価格、代償、コスト:対象者がその行動を採用するために差し出すもの。お金、時間、労力等)、③プレイス(場所、流通:対象者がいつ、どこで、その行動を行うのかということ)、④プロモーション(宣伝、販売促進:対象者がその行動を採用することを促進させる工夫のこと)。以上の「4つのP」がうまく組合わされると、対象者の行動変容をもたらす可能性が高くなるとされている。

2. 認知度調査の意味

認知度調査は、ソーシャル・マーケティングによると、当事業のプロモーション活動の成果を評価するものと言える。

ここで、先行する他事業のプロモーションの成果を参照しよう。平成17年3月にまとめられた長浜市の高齢者等実態調査において、介護保険制度の認知度調査結果が報告されている。「よく知っている」、「だいたい知っている」、「あまり知らない」、「全く知らない」の4段階の調査で、「よく知っている」、「だいたい知っている」を合わせた割合を「認知している」とすると、認知度は55歳～59歳で54.4%、60歳～64歳で54.4%、65歳～69歳で63.7%、70歳～74歳で65.2%、75～79歳で62.6%であった。介護保険は保険料徴収を伴う40歳以上の国民にとり身近な社会制度であるが、6年後の認知度は60%程度である。

一方、当事業の認知度は、導入3年目で40%近い。ケーブルTV、公報、講演会、チラシの配布等の様々な啓発を行ってきたが、このまま認知度が伸びれば6年目で介護保険制度のレベルまで到達することも不可能ではなからう。

しかし、認知度が高まっても、当事業へのボランティア登録者数が伸びなければ、その原因を究明する必要がある。一方、当事業の認知度が上昇することで、読み聞かせをはじめとした学校支援ボランティアのニーズが高まり、当事業とは無関係に、学校独自に高齢者ボランティアを募集・導入する事例が

散見された。市域全体のソーシャル・キャピタルへの影響という観点では、高齢者ボランティアの絶対数が増え、主催者である長浜市健康推進課の想定以上の波及効果が生まれたことになる。当事業が順調に認知度を伸ばすことができれば、高齢者人口に占める“REPRINTS”への登録ボランティア数の割合がさほど小さくなくても、「健康ながはま21」計画の評価指標を改善する原動力となるかもしれない。

3) 当事業への職員の認識

当事業は保健部門、教育部門、福祉部門の連携からなるヘルスプロモーション戦略である。当事業への認知度について市役所職員へ予備調査を行なったところ、教育委員会および福祉部子育て支援担当職員の認知度は70%、41%と高かった。保護者、一般市民、他課市役所職員いずれのアンケートにおいても「高齢者と子どもの双方が親しみを持つこと」への回答者の期待は高かった。ソーシャル・マーケティングによると、当事業のプロダクト(製品)は「学校で絵本の読み聞かせをする」ことだが、高齢者や保護者・一般市民が本当に求めているは「高齢者と子どもの世代間交流」であり、これが真のプロダクトだと言える。このことを行政職員は十分理解し、ボランティア募集の際の「売り」として活用し、時間や労力(コスト)を払う価値のあるものと認識すべきである。

E. 結論

当事業は導入3年目にして、保護者への認知度や評価が高まってきた。さらには一般市民への認知度も高まりつつある。

ソーシャル・マーケティング理論によるプロモーション(宣伝)活動の視点からは当事業における認知度向上策つまり、普及啓発戦略はある程度の成功をみたと言えよう。

[文献]

- 1) 松本千明. ソーシャル・マーケティングの基礎.

東京. 医歯薬出版. 2004.

- 2) 長浜市健康福祉部高齢者介護福祉課. 高齢者等実態調査報告書. 長浜市. 2004. 3.
- 3) ローレンスW・グリーン他. 実践ヘルスプロモーション. 東京. 医学書院. 2005.

F. 研究発表

1. 論文発表

- 1) 藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 他. 高齢者によるボランティア活動の意義と心身の健康に及ぼす影響—productivity としての理論から実践的課題へ—. 秋田県公衆衛生学雑誌 2006; 4:12-20.
- 2) 藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 他. 都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム—“REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果—. 日本公衆衛生雑誌 2006; 53:701-714.

2. 学会発表

- 1) 藤原佳典, 渡辺直紀, 西真理子, 他. 世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム “REPRINTS” —3. 児童の保護者への効果—. 第65回日本公衆衛生学会総会, 富山, 2006. 10. 25-27.
- 2) 明石圭子, 馬場富幸, 勅使河原弘美, 他. 世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム “REPRINTS” —4. 住民への認知度調査から—. 第65回日本公衆衛生学会総会, 富山, 2006. 10. 25-27.

- 3) 勅使河原弘美, 馬場富幸, 角野文彦, 他. 世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム “REPRINTS” —5. 既存の保健事業との相違—. 第65回日本公衆衛生学会総会, 富山, 2006. 10. 25-27.

G. 知的所有権の取得状況

なし

[研究協力者]

<長浜市> 勅使河原弘美, 馬場富幸, 草野良子, 国友登久子,
大和田敬子, 明石圭子, 清水厚子
(長浜市健康福祉部健康推進課),
弓削しおり, 浅田かず子, 鈴木登貴子
(長浜市学校ボランティア事業サポーター)
宮腰悦子 ((株) エツコワールド代表取締役)
福井 芳 (長浜市療育センター浜の子園)
伊藤路子 (長浜市立神照小学校)
米澤千波 (読み聞かせボランティアおもちゃ箱)
読み聞かせボランティアおもちゃ箱の皆さん

<川崎市> 木村俊彦 (川崎市立下布田小学校), 新垣英一, 鈴木幹男 (元同小学校), 熊谷裕紀子 (同小学校教育ボランティア・コーディネーター)
<東京都中央区> 向山行雄, 古川卓也, 佐久間明子 (中央区立阪本小学校), 植田たい子 (同小学校図書指導員)

厚生労働科学研究費補助金（長寿科学総合研究事業）

分担研究報告書

高齢者による小学校教育支援事業に関する研究 —ベースライン調査の結果を中心として—

分担研究者 内田 勇人

兵庫県立大学環境人間学部環境人間学科

〔要旨〕本研究は、小学校教育支援活動が高齢者と子どもの心身の健康に及ぼす影響について明らかにすることを目的とした。ここでは、ベースライン時と開始から1.5ヶ月後の特徴について、高齢者に対するグループインタビューの結果をもとに報告する。対象者は、介入群として兵庫県姫路市のA小学校区に在住する60歳～74歳の者6名（男3名、女3名）であった。各質問項目に対するグループインタビューの回答結果をまとめると、小学校教育支援活動が、参加した高齢者の「精神的満足感」や「社会的ネットワーク」の向上に結びついていたことが推察され、参加者の心理社会面に良い影響を与えていることが示唆された。今後、長期にわたって追跡をしていく予定であるが、子どもに及ぼす影響と合わせて、注意深く調査・検討を行っていききたい。

A. 研究目的

我が国の高齢化は急激に進行しており、その結果、社会に広範な影響を及ぼしつつあり、多くの対策を要請している。近年、高齢者においては平均寿命・健康寿命の延長にみられるように、元気で活発な生活を送る高齢者が数多くみられる。その一方で、高齢者が生きがいを持って働いたり、活動できる場は必ずしも多いとはいえず、社会において活動する意欲を有していながら、家の中で趣味に講じたり、種々の活動をする高齢者が多いのが実情である。家の中での活動が多くなることで、社会とのつながりが希薄になり、段々と閉じこもりがちになってしまい、心身の健康に負の影響を及ぼすことが危惧されている¹⁾。

その一方で、長期的な経済不況による家庭収入の減少から、父親とともに母親もパートタイマーとして仕事に従事する比率が高まっており、学校から帰宅しても子どもが独りで親の帰りを待つ生活が常態化しているケースが散見される。教師には言えな

い学校生活上の悩み、その他日々の生活上の悩みを子どもが独りで抱え込んでしまい、その結果、家に閉じこもったり、引きこもってしまう子どもの数が増加している²⁾。すなわち、高齢者における社会との繋がり希薄化、及び子どもの閉じこもり・引きこもりの両問題に対して、早期に有効な方策を立案・実施することが喫緊の課題として指摘されている。

本研究は、小学校教育支援活動（以下、教育支援活動）が高齢者と子どもの心身の健康に及ぼす影響について明らかにすることを目的とした。ここでは、ベースライン時と開始から1.5ヶ月後の特徴について、高齢者に対するグループインタビューの結果をもとに報告する。

B. 対象と方法

研究対象地域として兵庫県南西部に位置する姫路市を選んだ。2006年時における姫路市の人口は約53万6千人、面積が534.27km²、65歳以上の高齢者の人口割合は18.2%であった。

介入群として、兵庫県姫路市のA小学校区に在住する60歳～74歳の者6名（男3名、女3名）と同小学校に通学する1年生から3年生全員111名を選んだ。対照群として、同校区に在住する65歳以上者62名と隣接するB小学校に通学する1年生から3年生全員219名を設定した。参加者は小学校の教育支援者として週1日から3日、小学校の種々の活動・授業に参加した。具体的な内容は、登校時の教室での出迎え、朝の会（ホームルーム）への参加、休み時間における遊戯、担任教師の指示・指導のもと図画工作・読み書き・簡単な算数の計算・体育実技の補助等を行った。調査内容として、60歳以上者に対しては「家族構成」「外出頻度」「老研式活動能力指標」「日頃の付き合い」「健康度自己評価」「転倒の有無」「タイプA行動パターン」「抑うつ尺度」「自尊感情尺度」「Locus of Control (LOC) 尺度」「自己効力感」「個人活動」「社会活動」「学習活動」「地域共生意識」「各種体力テスト（握力、開眼片足立ち時間、歩行時間等）」等を選んだ。子どもに対しては「健康度自己評価」「規範意識」「対人関係」等を調査した。

教育支援活動は2007年2月初旬から開始

し、学年末の2007年3月中旬にいったん終了した。ベースライン時との比較において、経過期間が1.5ヶ月と短かったため、参加者のみに対してグループインタビューを実施し、教育支援活動に対する意識を把握することとした。

《倫理面への配慮》

対象者に対しては介入・対照両群とも、調査前に、事業の説明を行った。ベースライン調査の当日、事業全体について再度説明し、その際に本健診における個人データは、守秘義務により保証されること、希望者には個人結果票として還元されること、また、途中、棄権の自由が保障されることを確認し、同意の得られた者を対象に調査を実施した。小学生に対しても、教師の指導のもと、保護者には事前に本事業の実施に関する連絡を書面にて行った。アンケート調査を実施するにあたっては、担任教師から口頭にて個人情報への漏洩の厳守、途中で回答を拒否できることを十分に説明を行って頂いた。

C. 研究結果

グループインタビューで得られた回答を質問項目ごとにまとめた結果は、表1に示す如くであった。

表1 高齢者に対するグループインタビューの結果

番号	質問内容	回答
1	小学校教育支援ボランティア以外のボランティア	老人クラブ会長、博物館清掃、防犯パトロール、スクールヘルパー、下校時の立ち番、ほか。
2	小学校教育支援ボランティアに参加したきっかけ・動機	<ul style="list-style-type: none"> ・まずは先発でやってみよう ・地域の方々のボランティア活動を見て、自分も退職後やってみたくて考えていた。 ・探していた。タイミングが良かった。 ・主人をなくしボーとしていたが、何か始めるならボランティアから始めたいと思っていた。周り（家族等）から促されていた。 ・ずっと家にいたが、おばあさんを送って、何か世の中の役に立ちたいと思っていた。

3	小学校教育支援ボランティアに参加して	「楽しかったこと」「良かったこと」	<ul style="list-style-type: none"> ・やりがいを感じられた。 ・褒めた時の子どもの反応。 ・褒めた時の喜ぶ姿。 ・教えて子どもができた時に楽しかったし、参加して良かったと思った ・出来なかった子が出来るようになった。 ・音楽の時、大きな声で歌っていた。 ・素直さに感動した。 ・朝の始業前や中休みに縄跳びを一緒にした。 ・縄跳びの練習を一緒に取り組んだ。 ・成果をみてあげられた。 ・小さい子どもと接する、そのこと自体。 ・先生の指導が良かった。 ・若い人たちとの接触。 ・先生方との触れ合い。 ・初めて会ったのにフルネームで呼んでくれた。 ・一緒に遊ぼうと声を掛けてくれた。 ・鬼ごっこの時に「僕が守ってあげる」と言ってくれた。 ・みてみてと言って寄ってくる。 ・街のスーパーでお母さんから「お世話になっています」と声を掛けられた。 ・下校時に「今日はわたしと手をつないで欲しい」と言われた。 ・街で親からも挨拶された時。 ・子どもたちとの交わり。
4	小学校教育支援ボランティアに参加して	「面白かったこと」	<ul style="list-style-type: none"> ・3年生ではクラス単位で対抗意識を持っていて面白かった。 ・隣のクラスよりも大きな声で挨拶しようとしていた。 ・図工の絵で女子はきれい、男子は大胆に描くことを目にした。 ・出来ない子を子ども同士で助け合っていた。 ・個性があった。 ・子どもたちの気持ち。人を助ける精神がある。 ・図工の手伝いが出来た。縄跳びの縄を回した。体育、サッカー等を一緒にやった。こういう場でなくては、絶対に出来ないことが面白かった。 ・カルタ大会に参加した。 ・おはじきの見本をみせた。
5	小学校教育支援ボランティアに参加して	「困ったこと」	<ul style="list-style-type: none"> ・君づけで呼んではいけないのか？男女とも「さん」。「さん」と「君」、どちらか？ ・子どもの掃除の担当が複数箇所あり、1日で全て見てまわれなかった。 ・子どもが体育の授業時にチーム同士で挨拶しない。 ・最初の頃、授業をどの程度サポートして良いのか分からなかった。今は大丈夫。 ・最初、この活動の構造がわからなかった。最初の段階における担任の先生との関係。どう取り組んだら良いのか。生徒へのサポート、先生へのサポート。 ・積極的な子どもと消極的な子どもがいる。どの子どもも平等に接したい。 ・子どもが一人でいる時、どう接したら良いのか。 ・どこまで介入して良いのか悩んだ。
6	小学校教育支援ボランティアに参加して	「大変だったこと」	<ul style="list-style-type: none"> ・縄跳びですべて転んだ。 ・記憶力の低下。子どもの名前がなかなか憶えられなかった。 ・肉体的な疲れを感じる事が当初あった。 ・知力・記憶力が昨年から急激に衰えたような気がする。 ・明日の予定どうだったか？不安になる。 ・運動場でのサッカーはしんどかったけど楽しくもあった。私もこの学校の卒業生であるが、校庭を走って昔を思い出した。懐かしい気持ちになった。 ・「登り棒を登って」と言われた。

7	「心配・不安だったこと」	<ul style="list-style-type: none"> ・初めの頃、担任の先生とどう接したら良いのか心配だったが、しばらくして不安は解消した。 ・机を整えるように言いたかった。 ・しつけをどこまでしていいものか。 ・初めの頃、何をしていたか分からず不安だった。すぐに解消した。 ・子どものぞうきんの絞り方、ほうきのはき方等。 ・教育支援の段取り。 ・コミュニケーションのとり方。 ・子ども同士で遊ばない時があった。 ・PTAはこの活動を知っているのか気になった。
8	「気づいたこと」	<ul style="list-style-type: none"> ・掃除の見守りの重要性。 ・先生の指導力が素晴らしい。 ・朝の会、子どもたちが自主的に活動しており驚いた。 ・学校サポートの可能性に気づいた。 ・校外の清掃等、地域の高齢者ができることがたくさんあるように感じた。 ・下校時、横に並んで帰ったりして、車の運転手から注意された。 ・素晴らしい学校。
9	「ご自分自身で伸びたこと（良くなったこと）」	<ul style="list-style-type: none"> ・少しでも貢献できたのかと思う。 ・地域のあり方、個人と地域の関わりを考えられるようになった。 ・自分のお弁当を作ることが楽しかった。 ・ボランティア同士で誘い合って行く回数が増えた。 ・朝早い時間、深酒をひかえるようになった。 ・友人と話をする機会が増えた。 ・1週間に2日、緊張感がある。精一杯頑張ろうと思う。これらは自分にとって良い面に働くと思う。
10	子どもたちについての自由意見	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめがなかった。 ・昔と同じやんちゃ坊主だった。 ・「〇〇君は勉強できるけどサッカーはうまくない」と子どもが言っていた。その逆もあり面白かった。 ・子どもたちが朝の会で3分間スピーチをしていた。素晴らしかった。 ・自主性が高いのに驚いた。感心した。 ・色々な子どもがいて楽しかった。 ・率直で良い。 ・抱きついてくる。 ・触れ合いがあった。 ・素直で可愛い。 ・先生のお考えが素晴らしい。
11	全体に対する自由意見	<ul style="list-style-type: none"> ・先生やPTAがこの取り組みについてどう考えておられるか、本音を聞いてみたい。 ・利害関係はない。 ・子どもたち、先生のためになればと思う。

D. 考察

「他のボランティア活動への参加の有無」は参加者全員が有しており、活発な社会活動を有していた。「教育支援活動に参加したきっかけ・動機」は様々であったが、すでに老人クラブの会長を務めているといった地域における役割から「先発隊として率先してやらなければ」といった義務感、家族との離別、ボランティア活動に対する意欲、そして家族をはじめとする周りから

の促しが、きっかけ・動機の一つとなっていることがわかった。本人の意識はもちろんであるが、外的な要因が高齢者のボランティア参加・社会参加を考える上で影響を及ぼしていることが示唆された。

「教育支援活動に参加して楽しかったこと」として、「やりがいを感じられた」「子どもの素直さに感動した」「教えて子どもができた時に楽しかったし、参加して良かったと思った」「朝の始業前や中休みに縄

跳びやサッカーを一緒にした」といった回答がみられ、子どもと教室内外において良好で充実した活動ができていたとの意識が伺えた。その一方で「④教育支援活動に参加して困ったこと・大変だったこと」として、「一部の子どもが積極的に駆け寄ってきたり抱きついてきたりしたため、子ども全員にどう接したら良いのかわからなかった」「担任の先生が私たちのことを本音でどう思っているのか考えた」「記憶力・体力の減退」等の回答がみられた。楽しみと困難・不安を同時に抱えながら、充実した活動であったことが看取できる。

「全体を通して気づいたこと」は、「小学校で地域高齢者ができる活動はたくさんあると感じた」との回答がみられ、「自分自身で伸びたこと（良くなったこと）」は、「少しでも貢献できたのかと思う」「地域のあり方、個人と地域の関わりを考えられるようになった」「自分のお弁当を作ることが楽しかった」「ボランティア同士で誘い合って行く回数が増えた」「朝早いので、深酒をひかえるようになった」「友人と話をする機会が増えた」「1週間に2日、緊張感がある。精一杯頑張ろうと思う。これらは自分にとって良い面に働くと思う」といった回答がみられた。精神的満足感や社会的ネットワークの向上に結びついていたことが推察され、参加者の心理社会面に良い影響を与えていることが示唆された。

ボランティア活動が高齢者の生活満足度、抑うつ度、自己統制感、自尊心、健康度自己評価といった心理尺度に良い影響を及ぼすことが、横断的・縦断的研究から指摘されている³⁾。今後、本研究対象者に対して、長期にわたる追跡調査を実施していく予定であり、子どもや教師、家庭、地域に及ぼす影響も含めて、慎重に調査・検討をしていきたいと考える。

E. 結論

今後、長期にわたって追跡をしていく予

定であるが、60歳以上者にとって「教育支援活動」は心身に良い影響を与えうる可能性が、本研究より示唆された。子どもに及ぼす影響と合わせて、注意深く調査・検討を行っていきたい。

[文献]

- 1) 新開省二, 藤田幸司, 藤原佳典, 熊谷修, 天野秀紀, 吉田裕人, 寶貴旺, 渡辺修一郎. 地域高齢者におけるタイプ別閉じこもりの出現頻度とその特徴. 日本公衆衛生雑誌, 52(6), 443-455, 2005.
- 2) 堀内健太郎, 吉岡光爾, 小林清香, 野口博文, 伊藤順一郎. ひきこもり研究の観点からみた不登校予後調査のまとめ. 精神保健研究, 16, 153-158, 2003.
- 3) 藤原佳典, 杉原陽子, 新開省二. ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響—地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義—, 日本公衆衛生雑誌, 52(4), 293-307, 2005.

F. 研究発表

1. 論文発表

- 1) 内田勇人, 朝居由香里, 藤原佳典, 新開省二. 地域在住高齢者における車両スピード認知と身体能力との関係, 厚生学の指標 53(10), 7-12, 2006.

2. 解説

- 1) 内田勇人. 不定愁訴の子どもへの対応について, 心とからだの健康 (健学社, 東京), 10(5), 68-70, 2006.

3. 学会発表

- 1) 内田勇人, 藤原佳典, 新開省二: 高齢者の社会参加の促進と母親の育児ストレスの軽減に向けた介入研究—1年後の変化—, 第65回日本公衆衛生学会総会, 富山, 2006. 10
- 2) 安部裕美, 内田勇人: 中学生の食生活と不定愁訴の関係—孤食の実態を中心

- として一，第 65 回日本公衆衛生学会総会，富山，2006. 10
- 3) 谷口 優，安部裕美，伊地知昭浩，内田勇人：体操・文化活動が地域在住高齢者の心身機能に及ぼす影響—6 ヶ月間の追跡調査より一，第 65 回日本公衆衛生学会総会，富山，2006. 10
 - 4) 内田勇人，松浦伸郎，藤原佳典，新開省二：母親の育児ストレスの軽減に及ぼす育児支援活動の影響—1年間の追跡調査より一，第 13 回日本行動医学会総会，埼玉，2007. 3
 - 5) 内田勇人，安部裕美，藤原佳典，新開省二：高齢者による小学校教育支援事業に関する研究—ベースライン調査の結果を中心として一，第 49 回日本老年社会学会大会，札幌，2007. 6（予定）
 - 6) Uchida H, Fujiwara Y, Shinkai S. The parenting support for the mothers offered by the elderly and its influence on their physical and mental health. The 59th Annual Scientific Meeting of The Gerontological Society of America, Dallas,

USA. November 2006.

- 7) Uchida H, Fujiwara Y, Sakuma N, Kreta Y, Shinkai S. The relationships between the recognition of vehicle speed and physical ability while crossing a road among Japanese community-dwelling elderly people. The 60th Annual Scientific Meeting of The Gerontological Society of America, San Francisco, USA. November 2007. (Submitted)

G. 知的所有権

なし

研究協力者

西垣利男（兵庫県立大学教授）
奥田恭士（兵庫県立大学教授）
高頭直樹（兵庫県立大学教授）
田路秀樹（兵庫県立大学教授）
兵庫県姫路市教育委員会
兵庫県姫路市老人クラブ連合会

Ⅲ. 研究成果の刊行に関する一覧表

研究成果の刊行に関する一覧表

〈雑誌〉

著者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
藤原佳典, 渡辺直紀, 西真理子, 他	シニアボランティアとの交流が児童の高齢者イメージに及ぼす影響—世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム”REPRINTS”より	日本公衆衛生雑誌	(投稿中)		
吉田裕人, 藤原佳典, 天野秀紀, 他	介護予防事業の経済的側面からの評価—介護予防事業参加群と非参加群の医療・介護費用の推移分析—	日本公衆衛生雑誌	54	148-159	2007
新開省二	地域保健の現場から—2006年の介護保険制度改正を受けて高齢者地域保健現場はどのように変わったか—	Geriatric Medicine (老年医学)	45 (2)	117-121	2007
藤原佳典	団塊の世代の退職による地域保健活動への影響 2007年, 黒船来航か?	保健師ジャーナル	63 (2)	108-113	2007
藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 他	都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム—“REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果—	日本公衆衛生雑誌	53	702-712	2006
菅万理, 吉田裕人, 藤原佳典, 他	縦断的データから見た介護予防健診受診・非受診の要因	日本公衆衛生雑誌	53	688-701	2006
田中千晶, 吉田裕人, 藤原佳典, 他	地域高齢者における身体活動量と身体・心理・社会的変数との関連	日本公衆衛生雑誌	53	671-680	2006
内田勇人, 朝井由香里, 藤原佳典, 他	地域在住高齢者における車両スピード認知と身体能力との関係	厚生指標	53 (10)	7-12	2006
吉田祐子, 熊谷修, 岩佐一, 他	地域在住高齢者における運動習慣の定着に関連する要因	老年社会科学	28	348-358	2006
藤原佳典, 天野秀紀, 吉田裕人, 他	在宅自立高齢者の介護保険認定に関連する身体・心理的要因. 3年4ヶ月間の追跡調査から	日本公衆衛生雑誌	53	77-99	2006
藤原佳典	高齢者によるボランティア活動の意義と心身の健康に及ぼす影響—productivityとしての理論から実践的課題へ—	秋田県公衆衛生雑誌	4 (1)	12-20	2006
新開省二	閉じこもり予防	総合リハビリテーション	34	1041-1045	2006
新開省二	現場で役立つ調査方法—特に活動の評価をめぐって	福島県保健衛生情報	15(2)	20-24	2006
Fujita K, Fujiwara Y, Chaves PHM, et al.	Frequency of going outdoors as a good predictors for incident disability of physical function as well as disability recovery in community-dwelling older adults in rural Japan	J Epidemiology	16(6)	261-270	2006
Kwon J, Suzuki T, Kumagai S, et al.	Risk factors for dietary variety decline among Japanese elderly in a rural community: a 8-year follow-up study from TMIG-LISA	Eur J Clin Nutr	60	305-311	2006